

手から手へ 受け継がれた 伝統の技

IT社会になっても、変わらぬ和の伝統伎。今回はこの地域に1軒あるかないかの、希少な腕を持つ職人さんたちの店を訪ねました。

地元産の竹でホーキをつくる 三沢かご店



昭和の風情漂う店先

所沢街道沿いに66年前から続くかご店。店の前に大小さまざまなかご類がぶらさがっています。それにたくさん竹ポーク類。何だか懐かしい風景です。

この店の店主、三澤文利さん（66歳）は今も一人で竹ポークやつるしびな用の飾り輪をつくっています。材料は東久留米や小平の家から譲ってもらった孟宗竹。毎年霜が降りた後に、1年分の材料を切り出しに行きます。霜が降りる前だと水分が多すぎていたみやすく、つくってもゆがみがでる



飾り輪を製作中の三澤さん

とか。キズのない竹を選び、抱くように持ち帰ります。この時の竹選びが肝心で、後の製品の良し悪しを決めるのです。今は園芸店や造園業などからの注文が多いそうです。

もともと、三澤さんの父親は農家が市場に納める野菜のかごを主に編んでいました。当時は注文に追いつかず、夜なべ仕事に精出す父の姿をみながら大きくなった三澤さん。父から竹の裂き方を教わり、中学生までは跡を継ぐつもりでした。ところが、野菜かごは時代の流れとともに、プラスチック製品や段ボールに取って代わられ、三澤さんはやむなくサラリーマンの道を選びました。

店は三澤さんの妻、美枝子さんが守り、竹ポーク一本の注文でも自転車で配達していたそう。父親がつくる竹ポークの品質は評判がよく、晩年病気のため、もうつくれないことがわかれると、「オヤジのホーキがなく



上) 自然素材が美しいホーキ
下) ホーキは締めが大切



なると困るヨ、と一人で5本も10本も買っていくお客さんばかり、すぐに売り切れたんですよ」と美枝子さん。「オヤジの跡を継がないと技も無くなってしまおうと、60歳の定年になっただけに、ホーキをつくり始めました」と三澤さん。乾かした竹の枝（穂）を1番目、2番目、3番目と穂の数を増やしていき、枝の間に入れ込み針金で締めていくのですが、最初につくる芯をしっかりと締めておかないと、使っているうちに穂が抜けてくるそうです。最近のホーキは輸入品がほとんど。三澤さんが丹精込めてつくる竹ポークは粘りがあって腰が強い。ガタつきがなく抜けない、軽くて掃きやすい。女性の身長に合わせた竹ポークなど3種類あり値段は380円〜550円。すべて手作業なのにこの値段・・・世田谷から買いに来るお客さんもいます。

ここ10年は東久留米商工会女性部

が中心になり作っている、つるしびなを吊るす飾り輪を一手に引き受けています。直径28cmまでの竹の輪を各サイズつくるのですが、これがシンプル過ぎて難しい。真っ直ぐな竹じゃないと厚みが揃わない。切り出した竹で真っ直ぐなものは大切に、隠すように保管してあります。

一人息子俊一さんは大学を出て会社勤めでしたが、今は京都伝統工芸大学で竹工芸を勉強中。息子のことを話す夫妻の頬はゆるみっ放し。ものづくりのDNAは3代目にも受け継がれていくのでしょう。



美枝子さんやその友人が作るつるしびなと飾り輪

東久留米市中央町5-7-44
042(473)2959

ひたむきに50年桶づくりの匠技 金子風呂桶店

父の代から風呂桶をつくり続けて、この道50年。金子幸一さん(68歳)は「手造りの風呂桶の注文なんて、もうないですよ」といいますが、この2月、ある博物館に納める、昭和30年代に使われていた公団の風呂桶をつくりました。当時の寸法通りに再現しなくてはならず、幅1mの桶の中に上がり湯つきの内釜(桶の中に釜を内蔵)を据えるのに苦労したそうです。「こういうタイプの風呂桶は

20年ぶりにつくりましたね」

当時、次々に出現した公団の風呂は木桶で、それから10年ばかりは受注がさばききれないほどだったそうです。分業はしないので、1日に1人で2個つくることもザラでした。ところが時代とともに、風呂はポリヤステンレス製品の浴槽となり、注文は激減。廃業に追い込まれる風呂桶店が続きました。

そんな中であっても、材料のサワ



50年間つくり続ける金子さん

らを入れていた木曾の材木屋がつぶれても、金子さんは一人で黙々と半世紀の間つくり続けてきたのです。今は受注による製作のみですが、花手桶が多いとか。お墓参りに花や水を入れて持つていく桶です。有名な歌舞伎俳優の一門からや、生け花の先生が花器にしたいからといった注文もあります。

桶は側面になる木片と底板、そして外側を締め固めるタガからつくりられています。水分でふくらむ木の性質を利用した水がもれない入れ物。タガを外すとバラバラになります。だから修理もしやすいのでしょうか。「タガが外れる」とか「タガがゆるむ」という慣用語は桶のタガからきているのです。



左) 博物館へ納めた風呂桶
下) 年季の入った型と匠の手

花手桶、湯桶、おひつなど直径が違くと木片の丸みも異なるので、専用の道具が要ります。定規のような型に合わせて木を削りますが、内側と外側ではそれぞれの曲面に合わせたカンナが必要。「昔はカンナも丸みに応じて、自分でつくっていたものです。一番難しくて気を遣うのは、最後に底を入れる時ですね」と金子さん。少しの狂いでも仕上げに支障をきたす。本当に熟練の手わざを要する技術です。

「以前修理を頼まれた時、桶の底に明治何年とか書かれていた。古いものだし、修理代の方が新品より高くつくかもしれませんよ」と説明したら、思い入れのあるモノだからお願い



お祭りや居酒屋の看板など、提灯は今もあちこちで見かけ、私たちに馴染み深いものですが、それに名入れをする店はぐんと減っています。高野幸久さんは地域の神社や商店街のお祭り、居酒屋や個人から注文を受け、提灯に手書きで名入れをしています。生まれも育ちも東久留米。60年余り前、父が創業したタカノ商店で、サラリーマンをやりながら手伝っていました。

「見て覚えろ」が父親の口癖だったので、見よう見まねで修業し、20年前に跡を継ぎました。お祭りが増えてくる春から夏にかけてが殊に受注が多く忙しい。他にも、出産祝いにも赤ちゃんの名入りの提灯を贈りたいとか、会社の人の退職祝いとかの注文があります。中には外国人が自分の名前を漢字と英語の両方入れて、といった注文もくるとか。お祭りの時、通りにズラリと吊る

提灯に伝統の江戸文字を描く タカノ商店

た。当時は慶弔用の花輪も扱っていたので大変忙しかったようです。「昔は荷車で花輪を運んでいたよ」と高野さん。

形も丸型、長型、弓張提灯など。材質は外で使うものはビニール、中に置くものは和紙が多い。注文に応じて、骨組みや紙（ビニール）張りをされた状態のものを仕入れる。それに独特の江戸文字で描くわけですが、文字の当たりをつけ、面相筆で輪郭をとり、塗り筆で中を塗りつぶしていきます。

「でも、大体これ一本でいいね」と高野さんは使い込んだ筆を持って話します。机の上にはたくさんさんの筆がありますが、やはり使いやすい筆との相性があるようです。以前はすり鉢に砕いた墨と二カワを入れ玉じゃくしてころがしながら、墨汁をつくって

「皆に喜ばれて、お祭りに行っても自分がつくったものがあちこちに見られる時はうれしいよね。儲け度外視だよ」
東久留米市中央町5-12-18
☎042(471)2385



花手桶を乾燥中白木が清々しい下) 懐かしい湯桶とイス

「します、と言われましたね」
警沢品になったとしても。この貴重な伝統技術がなくなりませんように。



東村山市栄町3-31-48(府中街道沿)
☎042(391)3363



江戸文字を描く高野さん

される小さな提灯から、大提灯までサイズはいろいろ、

いたそうですが、技術が発達した現在では専用の塗料を使っています。描いたあとは表面に防水加工のための油を塗って乾かします。



個人の名入れ注文が多い弓張提灯



お祭り提灯もいろいろ